

と定めた譯である、此の中のB種の方を龜茲語と稱することの充分道理あることは既に「龜茲・于闐の研究」に於て之を述べて置いたが、焉耆語といふものに就てはその命名の理由を知らないから、こゝに至る迄の此の語の名稱の變遷を略述し、その命名の容易でなく、従つて最も慎重なる用意を要するものであることを述べて置く。

(ハ) 西夏語の發見。

西夏といふのは曰ふ迄もなく宋の時代に趙元昊の建てた國であるが、其の國語は有名なる居庸關の石刻を初め、涼州感通塔の銘文、敦煌莫高窟の銘刻、三四の佛典、さては印章貨幣などに残つては居たが、之を書き記して居る西夏文字なるものが殆んど讀解せられなかつたからして、折角僅かながら殘存して居る言語も全く解釋を得なかつた次第である、然るに一九〇七年から二年に亘つて、蒙古から北部西藏にかけて露西亞のカヅロフ(Kozlov)大佐の探險の結果、甘肅省エチナ(額齊納)河域のカラホトの遺墟から多くの西夏の遺物を獲得した、此の遺物は今露西亞の亞細亞博物館及び人種博物館に藏せられて居るが、その中西夏文字で書いた書籍文書の類丈けでも非常な數量に上つて居る、此の中に番漢合時掌中珠と題した漢語と西夏語との對譯辭書のあつたことは、從來不明に付せられた西夏文字及び西夏語を知るに就ての重要な鍵となつた譯である、此の辭書は甚だ用意周到なものであつて、ある西夏語を西夏字で書いて對應の漢語を漢字で左側に並記し、漢字の左側には西夏字でその發音を示し前の西夏字の右側にはまた漢字でその發音が示してある、西夏の乾祐二十一年即ち一一九〇年に、骨勒なる人の編纂に係るものである、それで若し宋代の漢字の音を知ることさへ出來れば書中の西夏字を讀むことが出來、従つてその西夏語